

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：33918

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830098

研究課題名（和文） 精神保健福祉における地域生活支援のソーシャルワークモデルに関する日米比較研究

研究課題名（英文） A Comparative study about a social work model of community support for people with mental illness in Japan and the U.S.

研究代表者

平澤 恵美 (HIRASAWA EMI)

日本福祉大学・福祉経営学部・助教

研究者番号：70611804

研究成果の概要（和文）：地域精神保健福祉のソーシャルワークの理論的枠組みを提示するために、アメリカと日本の地域精神保健福祉システムおよびモデルの実態調査をおこなった。その結果、日本とアメリカはそれぞれが異なる視点で地域生活支援のソーシャルワークを展開しており、日本型地域生活支援では集団を基本として、地域や周囲と相互支援関係を築くことが挙げられ、アメリカ型地域生活支援では、個人の尊重と相互支援の低さを特質として挙げる事ができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the research was to illustrate theoretical framework of social work model for people with mental illness in Japan and the U.S. The research also focused on systems and models used in each country. The result of the study showed that Japan and the U.S. have developed different approach toward social work practice for community support in the field of mental health. While Japan focused more on conformity and mutual-support relationship within family and community, the U.S. focused more on individuality and respect for independence in social work practice for people with mental illness.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：国際比較研究、精神保健福祉、地域生活支援、ソーシャルワーク、ソーシャルワークモデル、クラブハウスモデル、相互支援関係、グラウンデッド・セオリー

1. 研究開始当初の背景

(1) 世界の精神保健医療福祉における日本の位置づけとして、日本の精神医療が未だ精神科病院中心のケア体制であることが指摘

できる。精神科病床数については、世界でも数が多く、精神科入院期間についても、世界でも最も長い。1993年から精神科病院の増設がおこなわれなくなった現在においても、相対的な数については大きな変化もみら

れない現状において、いかに地域生活支援を推進すべきであるか、福祉の視点から検討すべき課題の一つであるといえる。

(2) 精神保健医療福祉における昨今の動向として、地域生活支援をテーマとした研究がみられるようになってきている。具体的な研究として、エンパワーメントアプローチを中心とした、コミュニティソーシャルワークのシステムモデルとなる総合的生活モデル(田中『精神障害者の地域生活支援』2005)や、クラブハウスの相互支援を中心とした参加・協働型地域生活支援システムモデル(寺谷『精神障害者の相互支援システムの展開』2008)など、地域を核としたシステムモデルの構築が展開されている。しかしながら、これらの地域精神保健福祉をテーマにした研究は、地域のなかにおける専門職と当事者の相互関係に焦点をあてたシステムの体系化が主となっており、日本独自のソーシャルワークにテーマを置いた地域生活支援の研究は十分におこなわれていない。

(3) 欧米とアジアという文化の異なる圏域における社会福祉の相違点から、東アジアにおけるソーシャルワークのあり方を検討する共同研究が数多くおこなわれている。こうした試みは、欧米文化の中から発展していったソーシャルワークの価値や概念の実践化をおこなうプロセスのなかで、アジアの文化的要素をいかに実践として組み入れるかということを検討するためにおこなわれており、これらの研究を更に発展させ、精神障がいのある人々という特定のテーマによる調査を通して、東アジアのソーシャルワーク実践についての理解を深めることができると考えられる。

(4) 研究代表がこれまでにおこなってきた調査から、日本とアメリカでは実践現場における支援の枠組みや視点が異なることが明らかにされている。それは、現場でのソーシャルワーカーの視点として、欧米では、個の存在、日本では家族の存在を意識したシステム・コミュニケーション・サポートが重視されていることが明らかにされている。これらの結果を踏まえて、それぞれの国におけるソーシャルワークのアプローチ、特に精神障がいのある人々を対象におこない、調査の内容を細分化することで、ソーシャルワークモデルの構築に取り組むことができる。

2. 研究の目的

本研究は、精神障がいのある人々を対象とした地域生活支援のソーシャルワークモデルを形成するために、以下の3点に焦点をあてながら、日米比較研究をおこなうことを目的

としている。

(1) 精神保健福祉における両国の地域ケアの歴史的展開を通じて、現代の精神保健福祉の実態を明確化すること。

日本の精神保健医療福祉における地域生活支援への試みは、諸外国と比較して、その動きは極めて緩やかであると言われている。昨今の動向としてようやく日本でも地域で精神障がいのある人々を支援するためのシステム、そして実践が検討されるようになってきている。こうした動向を受け、歴史的な背景から現在の日本とアメリカの地域精神保健福祉を捉えることにより、今後求められる展開を検討することができる。

(2) 日本とアメリカの社会的背景・文化的背景・精神保健福祉制度の相違によるソーシャルワークモデルの基盤を創出すること。

日本とアメリカにおける精神保健医療福祉の展開には、大きな時間的相違点が生じているように、システムや実践内容にも大きな違いがみられる。これらの相違点を比較検討することで、地域生活支援におけるシステム構築という観点から、今後の地域生活支援の展開で必要とされる実践内容および、今後の課題として考慮すべき内容を検討することができる。

(3) 日本とアメリカの地域生活支援の現場におけるソーシャルワーク実践を当事者・支援者の両面から理論的に枠組みを構築すること。

ソーシャルワークモデルの枠組みとして不可欠なのが、実際に行われている実践枠組みの構築である。それぞれの国でおこなわれている実践内容に着目することにより、システムの枠を超えた実践レベルでの支援内容の分析が可能である。それぞれの国における精神保健医療福祉の現場、ことさら現場の支援者のみならず、当事者を焦点として研究を実施することにより、ソーシャルワークを実践の視点から検討することができる。

3. 研究の方法

本研究のテーマである精神保健福祉における地域生活支援のソーシャルワークモデルに関する重要な論点を包括的に調査するために、以下の3つの方法を用いる。

(1) 文献調査：精神保健福祉の歴史的展開を捉え、時間軸のなかで展開されている地域生活支援を分析する。

日本とアメリカの精神保健医療福祉における歴史的展開を分析するために、時間軸を用いながら、これまでにおこなわれてきた研究や報告を整理する。また、時間軸のなか

に、制度・政策的な動向も含めていくことにより、歴史的な背景を包括的に捉え、現在の地域生活支援の現状に影響を及ぼしたであろう歴史的要素についても検討することができる。

(2) アンケート調査：社会的・文化的・制度的な背景から、精神保健福祉の現状を把握し、これらの基盤が中核となるシステムについても検討する。

日本とアメリカの地域で行われている中核システムに関する理解を深めるために、地域における精神保健福祉の現状に関するアンケート調査を関連機関及び特定した地域の自治体を対象としておこなう。それぞれの地域におけるシステム形成と特定のニーズに対応する支援の概要についての調査をおこなうことで、地域生活支援システムを比較することができる。

(3) インタビュー調査：日本とアメリカの実践現場において、当事者と支援者の両者の視点から、地域における支援のあり方について半構造化インタビューを用いてヒアリングをおこなう。

それぞれの実践現場から、異なる視点からの支援内容についてヒアリング調査をおこなうことにより、当事者ニーズと支援者の対応に対する整合性の確認ができるだけでなく、現場で実践されているソーシャルワークの視点と枠組みについて、分析することができる。

4. 研究成果

本研究を通して明らかになった点は以下の3点である。

(1) 日本の地域精神保健医療福祉における方向性の停滞

アメリカと日本の歴史的背景を時間軸に沿って比較分析することにより、日本における精神保健福祉の展開の特徴が明らかになった。日本では、それぞれの地域における実践の独自性や特性として、優れた実践が数多くみられるが、地域を基盤としたシステム体制としては、アメリカと比較しても、30年以上停滞しているという現状がみられた。また、精神保健医療福祉における国全体としての取り組みは停滞傾向にあり、地域生活支援への歩みは、明確な方向性が示されていない点が浮き彫りになった。

(2) 地域精神保健医療福祉の基盤となるシステム構築の困難

アメリカと日本における、一定の地域システムと実践を考察することで明らかになった点は、未だ精神科医療が中心となっておこ

なわれている地域実践が多い日本では、地域での新たなサービスや支援体制を構築することに難しさがあり、システムの柔軟性に欠けることから、利用者のニーズに合った地域生活支援を展開することが困難な環境下にあることがわかった。これは、アメリカの地域生活支援システムが、当事者のニーズに対応しながら、行政機関が必要なニーズへの支援に対して積極的に対応している点、そして、地域の企業がそれぞれの地域における活動に対して積極的に財政的な支援をおこなうという文化が発達している点からもわかる。法律や制度の枠の中でのみ、事業を展開することができる日本の現状から、利用者のニーズに応じた対応を、地域の中で展開していくための方向性を検討することが必要である。

(3) 日本型地域生活支援とアメリカ型地域生活支援の創出

実践現場における調査の分析を通して、日本とアメリカはそれぞれ異なる視点でソーシャルワークを展開しており、日本型地域生活支援では集団を基本として、地域や周囲と相互支援関係を築くことが特質として挙げられた。それは、ソーシャルワークの当事者を利用者のみに充てるのではなく、利用者として生活と共にする支援者である家族をソーシャルワークの対象として位置付ける点や、ソーシャルワークの実践が当事者の主体性のみを基盤とするのではなく、共に創りあげる支援の方法に寄与している点が挙げられるからである。一方、アメリカ型地域生活支援では、個人の尊重と相互支援の低さを特質として挙げることができた。アメリカでは、ソーシャルワークの対象が家族などと共に生活しているケースが少なく、対象と位置付ける場合も利用者のみとなる。家族と同居している場合でも、生活と共にするという意識の強さはみられず、同居する個人として、利用者を捉えている。また、ソーシャルワーカーも共に歩むという視点よりむしろ、主体的に生きる個人の自己決定を支援する立場を重視しており、文化的な背景が大きくかわっている点が指摘できる。こうした点からも、それぞれの文化・地域によって異なるソーシャルワークが展開されていることが明らかにされている。

今後の課題として、本研究で明らかになった理論的な枠組みをいかに実践的な枠組みに置き換えることができるのかを考え、精神障がいのある人々を対象とした、地域生活支援のソーシャルワークを具体的に示していく必要があるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 平澤恵美 (2013) 「精神障がいのある人々を対象とした地域生活支援モデルに関する事例研究」『中部社会福祉学研究』4, 65-73. 査読有

② Nonaka, T and Hirasawa, E (2012) A Community Mental Health Support System for People with Mental Illness in Japan. *International Journal of Mental Health*, 41(2), 19-28. 査読有

[学会発表] (計1件)

① 平澤恵美 (2013) 「精神科長期入院患者のグループホームにおける支援」『日本地域福祉学会 第27回大会』2013年6月8日～6月9日, 桃山学院大学

[図書] (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平澤 恵美 (HIRASAWA EMI)

研究者番号 : 70611804